HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	講演3「ウクライナにおけるロシア語とウクライナ語」
著者	ベイ，リュドミーラ; BEI, Lyudmila
引用	北海学園大学人文論集(75): 24-35
発行日	2023-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

講演３　「ウクライナにおける ロシア語とウクライナ語」

ベイ・リュドミーラ

○寺田氏　発表者はハリコフ大学元准教授のリュドミーラ・ベイ先生です。ハリコフ大学で教鞭を執られていた方です。長らく外国人留学生にロシア語やウクライナ語を教えられました。その後，ウクライナ学という一般教養科目をウクライナ人学生に教えられました。

2022 年 2 月 24 日のロシアのウクライナ侵攻以降，ベイ先生は，砲弾が飛び交う中，しばしば防空壕へ避難しながら生活を送られています。そんな中でも継続的に現地報告を届けてくださっています。

簡単な質問をすると，A4 で 20 枚くらいの分量で回答が来ます。何か書いていないと落ち着かないそうです。

彼女が暮らすハリコフ市の北部のサルトフカ地区は，かなり被害を受けています。実は，私も 2005 年に 3 か月程，そのサルトフカに住んでいました。私が住んでいたアパートはもう破壊されてしまっているそうです。北サルトフカというところは，被害がもっとひどく，ほとんど皆，別の場所へ避難したそうです。

今回は，幾つかある彼女の現地報告の中から，「ウクライナにおけるロシア語とウクライナ語」というタイトルの報告を御紹介します。

大変な困難の中にいらっしゃるということ，インターネット環境が劣悪なこと。１日のうちにインターネットを使える時間が限られているとのこと。そのような状況なので，現地からの映像は御紹介できません。そのため，

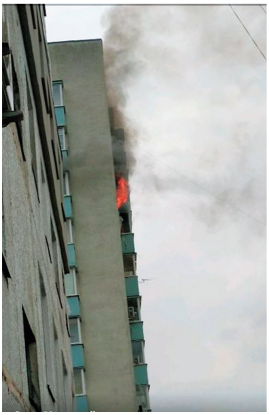
インターネット環境が良いときに送ってくださった写真を御紹介します。

報告の言語はロシア語だったのですが，それを私が翻訳して代読させていただきます。まず，写真を見ていただきます。

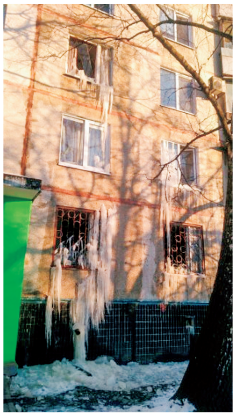
2010年の
平和なハリコフにて

サルトフカ地区から少し離れたところにある集合住宅

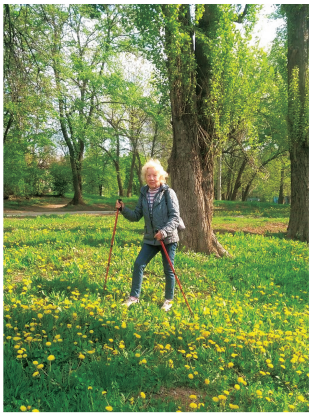
自宅窓からの景色



隣の集合住宅



向かいの集合住宅



ベイ先生（2022年春撮影）

左上は，2010年の平和なハリコフです。ベイ先生と知り合ったのは，それよりも20年前，まだソ連邦があった頃です。その下は，初夏ぐらいの撮影だと思います。ベイ先生の自宅の窓からの景色です。爆撃があったところです。右上はサルトフカ地区からちょっと離れたところです。砲弾が当たってます。ベイ先生の隣の集合住宅にも当たりました（左下)。向かいの集合住宅にも当たりました（中央下)。こんな中でベイ先生は生活されています。本当に危ないときは，離れたところに避難されているとのことです。しかし，ほとんどは自分のアパートに帰られています。右下は2022年の春先です。

それでは代読させていただきます。である調で読ませていただきます。時々，コメントを加えていくことにします。

※なお，寺田のコメントは［　］で括られている。

【外国人留学生と教育言語】

今，戦争が行われている。そんな時に外国人がウクライナへ留学することはないだろう。多くの留学生担当教員は仕事がなくなってしまうだろう。在学している外国人学生が学業を続けることに同意してくれるとしたら，教員にとっては幸いなことであろう。しかし，戦争中の国で効果的な学習ができるだろうか。外国人学生の大半が学んでいたのは，今，戦闘が行われているウクライナの東部と南東部に位置する大学なのである。

[さっき地図で見たところですよね。昔，キエフ・ルーシではなかったところですね。その，ウクライナの東部と南東部で戦闘が行われています。ほぼ全域でロシア語がもっぱら話されています。]

戦争以外にも外国人学生を集めることが困難であるもう一つの理由がある。すなわち，地域を問わず，全ての高等教育機関において，学習内容のウクライナ語への翻訳が必須である。

[私，結構，ウクライナに行っています。1997年から。長期滞在は1999年，2004年，それから2010年です。2010年ころ，ハリコフ大学の授業はウクライナ語でやっていました。でも，外国人留学生は，分からないですよね，ウクライナ語はほとんど勉強していないので。しかし，ウクライナ語で教育しなさいというお達しがくるわけです，国のほうから。それで，ウクライナ語で授業をしていたそうです。でも，学生は理解できずにぽかんとしていたので，先生方は，もう一回，ロシア語で授業をするという，二度手間をやっていたということです。それが，2004-2005年のオレンジ革命で生まれたユーシチェンコの政権がやっていたことです。]

大多数のウクライナの学生にとって，これは問題ではない。我々（ウクライナ国民）は，皆，ウクライナ語を学校で学んできた。また，子供たちは今学んでいる。ウクライナ語で書かれた文学や新聞，雑誌を自由に読み，ウクライナ語のテレビ番組や映画を見る。実際，ウクライナの住民の大半は何らかの程度にロシア語とウクライナ語を習得しているバイリンガルである。

[何らかの程度ですね。ロシア語のほうが得意だけれど，ウクライナ語もわかる。ウクライナ語のほうが得意だけれども，ロシア語もわかる。他にもいろいろなケースがあります。]

しかし，外国人にとって，ロシア語地域（例えば，ハリコフ，ドニエプロペトロフスク，ザポロージエ，オデッサ，クリヴォイ・ローグ，ヘルソン，ニコラーエフ，さらに，キエフ，クリミア）での学習は困難を伴う。なぜならば，毎日の生活の至るところでロシア語が聞こえるし，ロシア語でコミュニケーションを取る必要があるからである。私は，これ以上，ロシア語の重要性，汎用性，さらに，外国人が大学卒業後にロシア語を利用する可能性などについては，これ以上話さない。

【ロシア語排斥】

ここ数年，国家レベルのロシア語排斥が意識的に行われてきた。学校や高等教育機関，官公庁，企業において，また，日常のコミュニケーションにおいて，例えば，ウクライナ全土で，店舗（所有形態にかかわりなく）の従業員はウクライナ語で顧客と応対することを義務づけられている。そして，この決まりに違反する従業員を罰金や解雇で脅している。ロシア語地域，例えば，ハリコフなどにとって，これはロシア語禁止を意味する。少数民族が暮らす地域（ブコヴィナ，ザカルパチアなど）においても，母語であるチェコ語，ルーマニア語，ブルガリア語などを公的サービスの場（役所，店など）で使用することが禁止されている。ハリコフなどの都市では，スーパーの販売員やレジ係がロシア語を使用したということで，警戒心の強い顧客が警察に訴えるケースも多くあった。その結果，何人かの販売員が無職となった。しかし，ハリコフの住民はロシア語でコミュニケーションをとってきたし，現在もロシア語でコミュニケーションをとっている。

ハリコフでもウクライナ語を話す通行人が現れ始めた。彼らの多くは，そのポーランド・ハルィチナー訛りから，西ウクライナからやってきた人たちであると分かる。

[ベイ先生からこの報告があったのは，去年の9月2日でした。この出来事は，そのちょっと前のことだと思います。夏の終わりぐらいですね。ウクライナ語の標準語はポルタヴァ方言を基にしています。ポルタヴァというところは，長い間，ロシア帝国とソ連邦の影響のもとに，ロシア語が話されていた地域です。一方，実際に日常生活でウクライナ語がもっぱら話されていたのは，ハルィチナーです。そのハルィチナーのウクライナ語というのは，700年ぐらいの間，ポーランドに支配されていましたので，非常にポーランド語化されています。]

そういった人たちだけでなく，日常のコミュニケーションにおいて，愛国者的にウクライナ語へ言語を切り替えている生粋のハリコフっ子もいる。

これらのすべての現象が顕著に現れ始めたのは，「ウクライナ語の国家

語としての機能保障法」という法律が2019年7月に発効されたことと関連している。この法律が保障しているのは，ウクライナにおける唯一の国家語であるのはウクライナ語であり，国家全土における，国家機関，社会生活の領域に必須であるということである。この法律に従えば，国家語は，教育，医学の領域，労働関連や消費サービスの領域，さらに公衆に供される行事，宣伝などの領域において用いられなければならない。これ以外にも，この法律は，要人たちが国家語を習得し，職務を果たす場合に国家語を使用することを義務づけている。

[ゼレンスキー大統領は，ロシア語話者なのですけれども，必死にウクライナ語を勉強しました。以前，ティモシェンコという政治家がいました。彼女もロシア語話者なのですけれども，ウクライナ語を勉強していました。しかし，ヤヌコーヴィチ元大統領は全然ウクライナ語を勉強しませんでした。いろいろな人がいます。]

しかし，この法律の効力は個人的なコミュニケーションや宗教儀式を行う際には広がりを見せていない。

ウクライナの国家語であるべき言語がウクライナ語であるということには，誰も異議を唱えないであろう。ボランティアグループ「自由の空間」や「ウクライナ語で学べ」のモニタリング結果によると，この言語法は，ウクライナの全域で支持されている。西部住民の88%から南部住民の53%まで，多くの支持を集めている。

[このアンケートは，多分，東ウクライナでは統計を取っていないと考えられます。]

戦時中の今，ウクライナを防衛する者（ウクライナ軍や地域防衛隊）の中には，ウクライナ語話者もロシア語話者もいるので，言語問題の激しさは日常レベルでは低下したが，一方，国家レベルでは強まった。

[テレビの取材を受けるウクライナ兵たちはもっぱらロシア語をしゃべっています。]

西ウクライナでは，ロシア語は敵の言語，侵略者の言語と呼ばれ始めた。ウクライナの領土内で戦争が行われていることによって，今年（2022年）の9月1日から，多くの学校はロシア語を学校の教科から除外している（これを支持しているのが文部科学大臣セルゲイ・シカルレロ）。ただし，親たちは学校当局にロシア語を選択科目とするよう訴えることはできるようであるが。一方，高等教育機関では「ロシア語」や「ロシア文学」の専門が閉じられ，大学ではロシア語やロシア文学史の講座が閉じられている。特に，ハリコフの二つの大学（ハリコフ大学とハリコフ教育大学）では，該当する講座が「スラヴ諸語」，あるいは，「外国文学」の講座に含められてしまい，事実上，廃止された。以前であれば，父母会，教育界，学会が，このようなアプローチに反対の意を述べ，母語で話すことや母語で教育を受けることを禁止するといった言語差別について申し立てることができたが，今，戦争の状況下では不可能となった。

要するに，言語問題は決して副次的な問題ではないということが判明したと。

【言語問題】

私は，2000年代の初頭から，言語問題の進展に関心があったので，ウクライナの様々な地域の住民，生徒，学生の間で，ロシア語とウクライナ語がどのように話されているのか，つまり，言語分布の諸問題を研究し統計資料を調べた。そして，このテーマの論文を書き，学会で発表した。事実と統計を基に検討すると，ロシア語の排斥やロシア語の使用範囲制限が，ここ25～30年の間に，意識的に，意図的に行われたと言うことができる。ロシアを敵の表象とするかのように。特に2014年の事件（クーデター）の後。国家のこのような政策と社会の一部のロシア語に対する攻撃的な立場は，実際に，ウクライナの多くの地域間で憎悪を引き起こした。ロシア語話者としてのロシア民族への憎しみ，さらに，ロシアとは距離を取ろうと

する志向に火をつけた。しかし，ウクライナに対するロシアの行動も同様に，激しい感情に火をつけることに大いに貢献した。

ここ数年の統計調査のデータを見てみよう。最新の国政調査は2001年に行われた。そこでは，母語と日常使用言語についてのアンケート項目があった。その後，2001年以降，国勢調査は行われていないのだが，様々な社会学的調査センターがアンケートを行ってきた。そして，我々はその数値を活用することができる。しかし，活用の際には，様々な理由によってアンケート結果に特徴が出てくるということを留意しておくべきである。

① 誰がそのアンケートを企画したか。その企画者はどのような結果を待っているのか。

② ある状況下で，人は思っているとおりのことではなく，そうあるべきことを答える。

③ 人々の意見は，しばしばマスコミに左右される。特に左右されるのはテレビ放送である。現在，12のチャンネルが同じ情報を報道している。これは，24時間実況放送「ニュース・マラソン」と名付けられている。

④ 人々は状況に応じて日和見主義的に答える。誰がアンケートを行っているか，何を聞きたがっているのかに左右される。

ここ数年，アンケートは電話回答で行われている。回答者は1000人程度であり，それを超えて2000人になることはまれである。そのため，得られたデータの信頼性には疑問が残る。

言語使用は，自分をウクライナ人（ウクライナ民族）と認識しているか，あるいは，ロシア人（ロシア民族）と認識しているかということによって，大いに左右される。これらのエトノスの発生の歴史に深く立ち入ることはせず，ウクライナの住民の非単一性（多エトノス性）を説明する歴史的事実を言及するだけにしよう。

左岸ウクライナは，400年以上の間，ロシアと関係があった。

[左岸ウクライナとは，ドニエプル川よりも東の地域です。ドニエプル川は黒海に流れ込むので，川の流れから見て左は東側です。]

一方，右岸ウクライナ（ドニエプル川よりも西の地域）の多くの土地は，リトアニア大公国，ポーランド，オーストリアの支配下にあった。手から手へと，次々に所属が移った。左岸ウクライナのうち，主にウクライナ東部や南東部に居住しているロシア人は，自分たちを土着の住民とみなしており，自分たちの母語で意思疎通を図ったり教育を受けたりする権利があると思っている。しかし，現在の国家の制度・方針では，土着の民族に属するのはウクライナ人と，なぜか，クリミア・タタール人だけである。他の残りのエトノスの人たちは少数民族の中に入れられている。

[少数民族の中には，ハンガリー人，ブルガリア人，ルーマニア人などがいるし，それに加え，圧倒的多数の話者のいるロシア人も含まれています。]

人口地図は，ソビエト連邦の崩壊時から，特に2014年から大きく変化した。近年の統計調査では，クリミアやドンバスといった地域は対象に含まれていない。

2001年の国勢調査によると，ウクライナの人口の17％がロシア人（エトノス）だった。ロシアによるクリミアとウクライナの東部州の一部の占領後，自分をロシア人と認識している回答者数は，2014年に11％にまで減少した。そして，徐々に減少傾向が続いている。社会学的調査グループ「レイティング」（Rating Group Ukraine）による2022年の4月の調査データでは，自分自身をウクライナ人と認識する者が92％，ロシア人と認識するものが5％，また，3％の回答者は自分たちを他のエトノスと認識している。

それに対して，社会学やマーケティングの分野で権威のあるキエフ社会学国際研究所（KMIS）とラズムコフセンターの2020年の調査データによると，ウクライナ語が母語であると思っている回答者が73.4％，ロシア語

が母語であると思っている回答者が22%，他の言語が母語であると思っている回答者が1.7%である。しかし，家でウクライナ語のみでコミュニケーションをとっているのは53%のウクライナ国民だけであり，ロシア語でコミュニケーションを取っているのは15%のウクライナ国民。ウクライナ語とロシア語を同程度に使っているのは15%のウクライナ国民である。

社会学グループ「レイティング」によって，戦時下に全国規模で行われたウクライナ人の愛国主義傾向の強い調査の一つがインターネット上で2022年8月23日に公開された。

そのアンケートの結果は戦争前とやや異なっている。例えば，76%がウクライナ語を母語であると記入し，19%がロシア語を母語と記入した。その際，日常，ロシア語を話している人の30%がウクライナ語を自分の母語であるとみなしている。すなわち，それは，おそらく，民族的にウクライナ人に属するウクライナ国民なのであろう。だから，彼らはウクライナ語を母語と言っているのであろう。

家庭でロシア語よりもウクライナ語を頻繁に使用する人の数は増え続けている。今日では，51%の人が家でウクライナ語を話していると回答し，３分の１が両言語で，13%がロシア語で話していると回答している。ロシア語話者が両言語話者へ移行しつつある。南部と東部の住人の半数以上がバイリンガルであり，４分の１がロシア語のモノリンガルである。日常生活でロシア語だけを使用する人は約２分の１に減少した。

私は，公開されたアンケート結果を絶対視しない。なぜならば，これらの回答結果が1000人規模の回答者から得られたものだからである。

我々が，今置かれている状況では，社会的に望まれる回答がありうる。つまり，考えていることと回答することとが異なる場合である。しかし，これは，あらゆる社会学的アンケート調査にとっても問題である。回答者が誠実か否かということと，さらに，現在の政治状況に同調したいと思う気持ちが言語に関するアンケートの調査に影響を及ぼしている。

母語というのは，民族の言語であるだけでなく，家庭で会話したり，日

常生活でコミュニケーションをとったりする言語であると考える立場を私は支持する。後者は必ずしも民族的な所属に限定されない。

ウクライナでとても多い混血の家庭についてはどう言えばいいのか！？そのような家庭では，アイデンティティと家庭での言語使用とは，おそらく，以下のことに左右されるであろう。

「どの民族の文化の中で世界観が築かれ，また，その中で，その人自身が『気持ちがよい，快適である』と感じているか」

ウクライナ国民にとって，民族的アイデンティティと言語の使用はかなり複雑であることが分かった。おそらく，そのため，言語問題はウクライナ社会において衝突の原因となったのであろう。しかし，もし国家政策が言語問題を熱くしなければ，庶民にとって言語問題が躓きの石にはならなかったであろう。

私は，単一の国家言語（ウクライナ語）の支持者である。しかし，他のエトノスがコンパクトに普及している地域では，国家語以外にも，コミュニケーション全般において，その地域の民族語を使用する権利があると思う。

私の考えでは，いかなる法律も，ロシア語を母語とする人たち，あるいは，ロシア語が家庭の言語であり日常のコミュニケーションの言語としている人たちに，「明日」からロシア語を話すのをやめさせることはできない。言語問題において，思慮分別のある国家政策は，ウクライナ語の使用範囲を広げるための好ましい諸条件を作り出すことを基礎としていなければならない。しかし，民族語（その中には，ウクライナ語に次いで広まっているロシア語も入る）を圧迫したり排除したりすることはあってはならない。

【寺田吉孝による補足】

ウクライナ国内のかなり多くの都市や村を訪問した経験があります。ウクライナの統計資料にある言語状況と実際に現地を歩いた折に耳にした言語状況とは大きく異なるというのが実感です。

2019年に取材，撮影されたNHKの「世界ふれあい街歩き―キエフ―」を視聴したいと思います。実際の言語状況が反映されています。

（NHKの放送を視聴）

この番組では，街頭でインタビューを受ける市民がことごとくロシア語を使用しています。ウクライナ語を話しているのは，ウクライナ正教の聖職者だけです。2019年時点（「ウクライナ語の国家語としての機能保障法」が発行される前後）でのウクライナの言語状況を証言していると思います。

講演4　「ウクライナ語正書法史について」

寺　田　吉　孝

〇寺田氏

1798年に発行されたコトリャレフスキィ（ウクライナ語でコトリャレウシクィィ）の『エネイーダ』は，ウクライナ語のポルタヴァ方言で書かれています。これはウクライナ文学の始まりであると同時に，ウクライナ語を文字化する契機となりました。しかし，ロシア帝国とソ連邦の下で，ポルタヴァではロシア語化が進み，ウクライナ語を耳にすることが少なくなっていきました。

ウクライナ語正書法史では，ウクライナ語正書法をロシア語正書法に近づけるか否かが常に問題となっていましたが，1991年以降は，ウクライナ独自の正書法が確立されつつあります。また，ディアスポラアが使うウクライナ語も正書法に反映させようという動きもあります。

このディアスポラは，主に19世紀後半以降，ポーランド（当時はオーストリアに併合されていた）が支配する西ウクライナ（特に，ハルィチナー）から，アメリカやカナダ等へ移住した人たちです。